

# デューラー作《四人の使徒》の模写について

鈴木 杜幾子



図1 展示風景

二〇一〇年十一月十三日に明治学院大学白金キャンパスで開催された「デューラー受容史 五〇〇年」シンポジウムに会場された方は、会場の演壇脇に展示されていたデューラー作《四人の使徒》の模写をご記憶のことと思う(図1)。

このシンポジウムでは、国内の主だったデューラー研究者をパネリストとして招聘し、デューラーが後世

に与えた影響、あるいは後世がデューラーに見いだした遺産について、さまざまな角度から語って頂いた。その詳細は本誌のシンポジウム報告に譲ることとし、ここでは前述の模写について簡単な紹介をおこなうこととしたい。

これは現在ミュンヘンのアルテ・ピナコテークに所蔵されている原作(図2 一五二六年作、板に油彩、右パネル 25.5cm×76cm、左パネル 21.5cm×76cm)の模写である。作者は国籍も含めて不詳、おそらく大正末か昭和初めの作で、板に油彩、左右のパネル寸法は約123×43.5cmである。一九七〇年代初めまで、信濃町駅前に今もあるカトリック系施設「真生会館」に飾られていたが、当会館の建て替えに当たって不要となり、爾来四十年近く鈴木氏の自宅に保管されていたものである。

日本ではフランスやイタリアの美術にくらべてドイツ美術に



図2 デューラー作《四人の使徒》

はなじみの薄い人が多いと思うが、ドイツ絵画史におけるデューラーは、イタリア美術史におけるラファエッロ、イギリス文学史におけるシェークスピア並みに重要な人物である。《四人の使徒》はそのデューラーの晩年の大作で、画家が居住地ニュルンベルクの市参事会に寄贈したものである。寄贈の動機は宗教改革が荒れ狂う時代において、人々がともすれば動揺し、「偽

預言者」に惑わされがちであることをいましめるためであったという。事実、原作の画面下部に記されている聖書の引用の冒頭に、改革派であった画家自身が世の支配者に向けて、「人の惑わしを神の御言葉と取り違えないようこの四人の偉人に従うべし」という意味の言葉を書いているのである（この文字部分は模写では省略されている）。

「四人の偉人」とは、いうまでもなくこの絵に描かれているヨハネ、ペテロ、マルコ、パウロ（向かって左から右の順）であるが、実はマルコはキリストの十二使徒には含まれていず、「福音書記者」の一人である。

この作品についての研究は無数にあるが、中でも「イコノロジー」（画像解釈学）の方法の確立者として知られるエルヴィン・パノフスキーと、日本における最大のデューラー研究者であった故前川誠郎がこの作品に関しておこなった考察は重要である。特にパノフスキーがいわゆる「四性論」を根拠に、ヨハネ⇨多血質、ペテロ⇨粘液質、マルコ⇨胆汁質、パウロ⇨憂鬱質にあてはめたことはよく知られている。また前川は使徒ではないマルコが含まれている理由として、新約聖書の「聖マルコ伝」のキリストが使徒たちに伝道の旅に出るよう命ずる箇所

で、杖以外には何も持たず、「ただわらじをはくだけで」簡素な服装で行くように指示していることを指摘し、この絵の主題を「キリストによる使徒の派遣」と解釈している。つまり使徒ではないマルコの登場は主題の典拠が「聖マルコ伝」であるがゆえであり、画中の四人の履物がきわめて丁寧に描かれている点もそれで説明ができるというのである。

筆者はドイツ美術史の専門家ではないので、本稿のデューラーに関する部分については、シンポジウムにも参加された同志社大学名誉教授勝國興氏と九州産業大学下村耕史氏の考察に多くを負っているが、この前川説を知ったのも、シンポジウムの翌日、国立西洋美術館でおこなわれた勝氏の講演「デューラー 研究家、前川誠郎」によってであった。氏は講演のなかで「明治学院の模写」にも触れ、原作の「革を一枚重ねた履物」が、模写にも忠実に再現されていると指摘された。

筆者は、プロテスタントに共感を寄せていたデューラーのこ

の模写を、長い年月奉職した明治学院にいつか寄贈したいと思いつつ、機会がなくてそのままになっていた。今回同僚の大原まゆみ教授がデューラー受容をテーマにシンポジウムを企画しているのと知ったとき、これ以上の機会は望めないとただちに確信した。なぜならば「模写」とは、原作者に対する最大の愛と敬意をこめた「受容」にはかならないからである。

また、会場に展示することによって、全国のデューラー、あるいはドイツ美術の専門家たちにこの模写を披露することができたのも、思ってもみない幸運であった。幸い美術史や絵画修復の専門家たちからは、異口同音に「まじめに描かれた感じのよい模写」という評価を頂くことができ、漠然と感じていたこの模写に対する温かな気持ち裏付けされたようで、個人的にも幸せな体験であった。明治学院のものとなったこの模写が、今後適切な設置条件のもとで多くの人々の眼に触れることを願ってやまない。